

# 日蓮大聖人御書全集

さんぜしよぶつそうかんもんきょうそうはいりゆう

## 三世諸仏総勘文教相廃立

そうかんもんしやう

(総勘文抄)

さんぜしよぶつそうかんもんききょうそうはいりゆう

そうかんもんしきょう

# 三世諸仏総勘文教相廃立（総勘文抄）

こうあん

ねん

がつ

弘安 2 年 (79) 10 月

58 歳

にちれん

せん

日蓮これを撰す。

そ いちだいしきょう

そう

ごじゅうねん

せつききょう

夫れ、一代聖教とは、総じて五十年の説教なり。これ

いっさいききょう

わ

ふた

いち

を一切経とは言ふなり。これを分かちて二つとなす。一に

けた に じききょう

は化他、二には自行なり。

いち けた ききょう

ほけききょう

さき

しじゅうにねん

あいだと

一に化他の経とは、法華経より前の四十二年の間説き

たま もろもろ ききょう

ごんききょう

い

給える諸の経教なり。これをば権教と云い、または

ほうべん な

しききょう

なか

さんぞうききょう

つうききょう

べつききょう

方便と名づく。これは四教の中には、三蔵教・通教・別教

の三教なり。五時の中には、華嚴・阿含・方等・般若なり。  
法華より前の四時の経教なり。また、十界の中には、前の  
九法界なり。

また、夢と寤との中には、夢の中の善悪なり。また、夢  
をば権と云い、寤をば実と云うなり。この故は、夢は仮有  
にして体・性無きが故に、名づけて権と云うなり。寤は  
常住にして不変の心の体なるが故に、これを名づけて実

となす。故に、四十二年の諸の経教は、生死の夢の中の  
善悪の事を説くが故に、権教と言う。夢中の衆生を誘引し

驚覚きやうがくして法華經ほけきやうの寤うつつと成さんと思しめしての支度おほ・方便したくの經教きやうぎやうなるが故ゆえに、權教ごんきやうと言いう。

これによつて、文字もんじの讀みよを糾ただして心得こころうべきなり。故ゆえに權ごんをば權かりと讀よむ。權ごんなる事じの手本てほんには、夢ゆめをもつて本ほんとなす。

また実じつをば実まことと讀よむ。実事じつじの手本てほんは寤うつつなり。故ゆえに、生死しやうじの夢ゆめは權ごんにして性しやう・体たい無なければ、權ごんなる事じの手本てほんなり。故ゆえにもうぞう妄い想ほんがくと云うつ。本覚ほんがくの寤うつつは実じつにして生滅しやうめつを離はなれたる心こころなれ

ば、真実しんじつの手本てほんなり。故ゆえに実相じつそうと云いう。ここをもつて權実ごんじつの

二字にじを糾ただして、一代聖教いちだいしやうぎやうの化他けたの權ごんと自行じぎやうの实じつとの差別さべつ

をしるべきなり。故に、四教の中には前の三教と、五時の

中には前の四時と、十法界の中には前の九法界は、同じく皆

夢の中の善悪の事を説くなり。故に、権教と云う。

この教相をば、無量義経に「四十余年、未顕真実」と説

きたもう已上。

未顕真実の諸経は夢中の権教なり。故に、釈籤に云わ

く「性は殊なることなしといえども、必ず幻に藉つて、幻

の機と幻の感と幻の応と幻の赴とを発す。能応と所化は、

ならびに権実にあらず」已上。これ皆、夢幻の中の方便の教

しょう こと

とう

ゆめみ

えなり。「性は殊なることなしといえども」等とは、夢見る

しんしょう うつつ とき しんしょう

ひと しんしょう

心性と寤の時の心性とはただ一つの心性にして、すべ

こと

ゆめ なか こじ うつつ とき

て異なることなしといえども、夢の中の虚事と寤の時の

じつじ

にじひと

しんぼう

み

おも

わ

実事と、二事一つの心法なるをもつて、見ると思うも我が

こころ

い しゃく

ゆえ

しかん い

さき さんぎよう

心なりと云う釈なり。故に、止観に云わく「前の三教の

しぐ

のう しょ ぼろ

いじよう

しぐ

しゆじよう

むへん

四弘、能も所も混ぶ」已上。「四弘」とは、衆生の無辺な

ど

せいがん

ぼんのう

むへん

だん

せいがん

るを度せんと誓願し、煩惱の無辺なるを断せんと誓願し、

ほうもん

むじん

し

せいがん

むじようぼだい

しよう

法門の無尽なるを知らんと誓願し、無上菩提を証せんと

せいがん

しぐ

い

のう

によらい

しょ

誓願す。これを「四弘」と云う。「能」とは如来なり、「所」

しゆじよう

しぐ

のう

ほとけ

しよ

しゆじよう

さき

とは衆生なり。この四弘は、能の仏も所の衆生も、前の

さんぎよう

みなむちゆう

ぜひ

しゃく

たま

三教は皆夢中の是非なりと釈し給えるなり。

ほつけいぜん

しじゆうにねん

あいだ

せつきよう

しよきよう

しかれば、法華以前の四十二年の間の説教たる諸経は、

みけんしんじつ

ごんきよう

ほうべん

ほつけ

と

よ

未顕真実の権教なり、方便なり。法華に取り寄せるべき

ほうべん

ゆえ

しんじつ

ほとけみずか

方便なるが故に、真実にはあらず。これは、仏自ら

しじゆうにねん

あいだと

あつ

たま

のち

いま

ほけきよう

と

四十二年の間説き集め給いて後に、今、法華経を説かんと

ほつ

じよぶん

かいきよう

むりようぎきよう

とき

ほとけみずか

かんもん

欲して、まず序分の開経の無量義経の時、仏自ら勘文し

たま

きようそつ

ひと

うたげ

い

ふしん

な

給える教相なれば、人の語も入るべからず、不審をも生す

べからず。

故に、玄義に云わく「九界を権となし、仏界を實となす」

いじよう くほうかい ごん しじゅうにねん せつきよう ぶつぼうかい じつ

已上。九法界の権は四十二年の説教なり。仏法界の實は

はちかねん せつ ほけきよう ゆえ ほけきよう ぶつじよう い

八箇年の説、法華經これなり。故に、法華經をば仏乗と云

くかい しようじ ゆめ ことわり ごんきよう い ぶっかい

う。九界の生死は夢の理なれば権教と云い、仏界の

じようじゆう うつつ ことわり じつきよう い ゆえ ごじゆうねん

常住は寤の理なれば実教と云う。故に、五十年の

せつきよう いちだい しようぎよう いつさい しよきよう けた しじゅうにねん

説教、一代の聖教、一切の諸經は、化他の四十二年の

ごんきよう じぎよう はちかねん じつきよう がっ ごじゆうねん ごん

権教と自行の八箇年の実教と合して五十年なれば、権と

じつ ふた もんじ かがみ か くも な

實との二つの文字をもつて鏡に懸けて陰り無し。

ゆえ さんぞうきよう しゆきよう さんそうぎ ひやくだいこう へ

故に、三蔵教を修行すること三僧祇・百大劫を歴て、



ついに ほとけ な おも わ み ひ い けしん  
終に 仏に 成らんと 思えば、我が 身より 火を出だして、 灰身  
に ゆうめつ はい な う つうぎよう しゆぎよう

入滅とて 灰と成つて 失せぬるなり。 通教を 修行すること

しちあそうぎ ひやくだいこう み ほとけ な おも さき

七阿僧祇・百大劫を 満てて、 仏に 成らんと 思えば、 前の

どうよう けしんにゆうめつ あとかた な う

ごとく 同様に 灰身入滅して 跡形も 無く 失せぬるなり。

べつきよう しゆぎよう にじゆうにだいあそうぎ ひやくせんまんこう つ

別教を 修行すること 二十一大阿僧祇・百千万劫を 尽く

ついに ほとけ な おも しようじ ゆめ なか ごんきよう

して、 終に 仏に 成らんと 思えば、 生死の 夢の中の 権教の

じようぶつ ほんがく うつつ ほけきよう とき べつきよう じつ

成仏なれば、 本覚の 寤の 法華経の 時には、 別教には 実の

ほとけな ゆめ なか か ゆえ べつきよう きようどう じつ ほとけ

仏無し、 夢の中の 果なり。 故に、 別教の 教道には 実の 仏

な い べつきよう しようどう しょじ はじ いちぶん

無しと云うなり。 別教の 証道には、 初地に 始めて 一分の

むみよう だん いちぶん ちゆうどう り あらわ はじ み  
無明を断じて一分の中道の理を顕し、始めてこれを見れ

べつきよう きやくりやくふゆう おし し えんぎよう うつ い  
ば、別教は隔歴不融の教えと知って、円教に移り入つ

えんにん な お べつきよう とど じよう  
て円人と成り已わって、別教には留まらざるなり。上・

ちゆう げ さんこん ふどう あ ゆえ しよじ にじ さんじないしとう  
中・下の三根の不同有るが故に、初地・二地・三地乃至等

がく えんにん な ゆえ べつきよう おもて ほとけな  
覚までも円人と成る。故に、別教の面には仏無きなり。

ゆえ きよう あ にんな い  
故に、「教のみ有つて人無し」と云うなり。

ゆえ しゆごこつかいしよう い うい ほうぶつ むりゆう ごんか さき  
故に、守護国界章に云わく「有為の報仏は夢中の権果へ前

さんぎよう しゆぎよう ほとけ むさ さんじん かくぜん じつぶつ のち  
の三教の修行の仏、無作の三身は覚前の実仏なり（後の

えんぎよう かんじん ほとけ い べつきよう さんじん  
円教の観心の仏）。また云わく「権教の三身はいまだ

むじよう まぬか さき さんぎよう しゆぎよう ほとけ じつきよう さんじん  
無常を免れず 前の三教の修行の仏、実教の三身は  
くたいくゆう のち えんぎよう かんじん ほとけ しゃく よ よ  
俱体俱用なり 後の円教の觀心の仏。この釈を能く能  
こころう ごんきよう なんぎようくぎよう ほとけ な  
く意得べきなり。權教は難行苦行して、たまたま仏に成  
おも ゆめ なか ごん ほとけ ほんがく うつつ とき  
りぬと思えば、夢の中の權の仏なれば、本覺の寤の時に  
じつ ほとけな ごつか ほとけな きよう あ にん  
は実の仏無きなり。極果の仏無ければ、「教のみ有つて人  
なし」なり。いわんや教法実ならんや。これを取つて修行  
しやうぎよう まよ さき さんぎよう ほとけ な  
せんは、聖教に迷えるなり。この前の三教には仏に成ら  
しやうこ と お たま まつだい しゆじよう えげ ひら  
ざる証拠を説き置き給いて、末代の衆生に慧解を開かしむ  
るなり。

くかい しゅじょう いちねん むみよう ねむ なか しょうじ

九界の衆生は、一念の無明の眠りの中において、生死の

ゆめ おぼ ほんがく うつつ わす ゆめ ぜひ しゅう くら

夢に溺れて本覚の寤を忘れ、夢の是非に執して冥きより

くら い ゆえ によらい われ しょうじ ゆめ なか い

冥きに入る。この故に、如来は我らが生死の夢の中に入つ

てんどう しゅじょう どう ゆめ なか ことば ゆめ なか

て、顛倒の衆生に同じて夢の中の語をもつて夢の中の

しゅじょう いざな ゆめ なか ぜんあく さべつ じ と ぜんぜん

衆生を誘い、夢の中の善悪の差別の事を説いて漸々に

ゆういん たも ゆめ なか ぜんあく じちようじよう しよう ぶりよう

誘引し給うに、夢の中の善悪の事重畳して様々に無量

むへん ぜんじ じよう ちゆう げ た さんじよう

無辺なれば、まず善事について上・中・下を立つ。三乗

ほう さんさんくほん と お のち

の法これなり。三三九品なり。かくのごとく説き已わつて後

じようじようほん こんほんぜん た じよう ちゆう げ さんさんくほん

に、また上上品の根本善を立て、上・中・下の三三九品

の善ぜんと云いう。皆みなことごとく九界生死の夢の中の善悪・是非ぜひな

り。今これをば総そうじて邪見外道となす くかいしやうじ 〈搜要記の意〉。

この上うえに、また、「上上品の善心は本覚の寤の理ことわりな

れば、これを善の本と云う」と説き聞かせ給たまいし時に、夢ゆめの

中の善悪の悟りの力をもつての故に、寤の本心の実相じつそうの

理りを始はじめて聞知せらるることなり。この時に仏説ほとけいて言のたま

わく「夢と寤との二つは虚事と実事との二つの事なれども、

心法はただ一つなり。眠りの縁に値ねいぬれば夢なり。眠り去さ

りぬれば寤の心なり。心法はただ一つなり」。開会かいえせらる

べき下地したじを造り置かれし方便ほうべんなりへこれは別教べつきようの中道ちゆうどうの理りなり。

ゆえ

じっかいごぐ

えんゆうそうそく

あらわ

この故ゆえに、いまだ十界互具・円融相即を顕あさざれば、

じようぶつ

にんな

ゆえ

さんぞうきよう

べつきよう

いた

成仏じじゆうの人無し。故ゆえに、三蔵教より別教べつきように至るまで、

しじゆうにねん

あいだ

はつきよう

みな

ほうべん

ゆめ

なか

四十二年の間の八教は、皆ことごとく方便ほうべんなり、夢の中の

ぜんあく

もち

しじゆう

ゆういん

たも

善悪ぜんあくなり。ただしばらくこれを用いて衆生を誘引し給う

したく

ほうべん

支度・方便ほうべんなり。

ごんきよう

なか

ぶんぶん

みな

ほうべん

しんじつ

あ

この権教ごんじつの中にも、分々に皆ことごとく方便ほうべんと真実しんじつと有

ごんじつ

ほうか

しきよういちいち

おのおのしもんあ

つて、権実ごんじつの法闕ほうかけざるなり。四教しきよう一々に各おのおの四門しもん有つて

差別有ることなし。さべつあ 語もただ同じ語なり。ことば 文字も異なるおな ことば もんじ ことなし。ことば これに由つて語に迷つて権実の差別を分別せざる時を、とき 仏法滅すと云う。ぶつぽうめつ い

この方便の教えは、ただ穢土に有つて、総じて浄土には無ほうべん おし えど あ そう じょうど な きなり。法華經に云わく「十方の仏土の中には、ただ一乘ほけきよう い じつぼう ぶつど なか いちじよう

の法のみ有り。二無くまた三無し。仏の方便の説を除く」ほう あ にな さんな ほとけ ほうべん せつ のぞ

已上。故に知んぬ、十方の仏土に無き方便の教えを取つていじよう ゆえ し じつぼう ぶつど な ほうべん おし と

往生の行となし、十方の浄土に有る一乗の法をば、これおうじよう ぎよう じつぼう じょうど あ いちじよう ほう

を嫌つて取らずして成仏すべき道理有るべしや否や。きら と じょうぶつ どうりあ いな

いちだい きようしゆ しやかによらい いっさいきよう と かんもん たま のたま

一代の教主・釈迦如来、一切経を説き勘文し給いて言

さんぜ しよぶつ どうよう ひと ことばひと ところ かんもん たま

わく「三世の諸仏、同様に一つ語一つ心に勘文し給える

せつぼう ぎしき われ いちごん たが

説法の儀式なれば、我もかくのごとく、一言も違わざる

せつきよう しだい うんぬん ほうべんぼん い さんぜ しよぶつ せつぼう

説教の次第なり」云々。方便品に云わく「三世の諸仏の説法

ぎしき われ いま むふんべつ ほう と

の儀式のごとく、我も今またかくのごとく無分別の法を説

いじよう むふんべつ ほう いちじよう みようほう ぜんあく えら

く「已上。「無分別の法」とは一乗の妙法なり。善悪を簡

そうもく じゆりん さんが だいち いちみじん なか

ぶことなく、草木・樹林・山河・大地にも一微塵の中にも、

たが おのおのじつぼうかい ほう ぐそく わ こころ みようほうれんげきよう

互いに各十法界の法を具足す。我が心の妙法蓮華経の

いちじよう じつぼう じようど しゆうへん か じつぼう

一乗は、十方の浄土に周遍して闕くることなし。十方の



じょうど えほう しょうほう くどくしやうごん わ こころ なか あ

浄土の依報・正報の功德莊嚴は、我が心の中に有つて

かたとき はな さんじんそくいち ほんがく によらい ほか

片時も離るることなき三身即一の本覚の如来にて、この外

ほうな いつぼう じつぼう じょうど あ よほう あ

には法無し。この一法ばかり十方の浄土に有つて、余法有る

ことなし。故に「無分別の法」と云うはこれなり。この一乗 いちじやう

みやうほう ぎやう と まつた じやうど な ほうべん おし

妙法の行をば取らずして、全く浄土には無き方便の教え

と じやうぶつ ぎやう まよ なか まよ われ

を取つて成仏の行となさんは、迷いの中の迷いなり。我

ほとけ な のち えど た かえ えど しゆじやう ぶつぼうかい

仏に成つて後に穢土に立ち還つて、穢土の衆生を仏法界

い しだい ゆうにゆう ほうべん おし と

に入らしめんがために、次第に誘入して方便の教えを説く

けた おし い ゆえ ごんきやう い ほうべん

を、化他の教えとは云うなり。故に、権教と言ひ、また方便

を、化他の教えとは云うなり。故に、権教と言ひ、また方便

とも云う。

けた ほうもん あさま だいたい りやく そんな  
化他の法門の有り様、大体、略を存して、かくのごとし。

に じぎよう ほう ほけきようはちかねん せつ きよう  
二に自行の法とは、これ法華経八箇年の説なり。この経

うつつ ほんしん と しゅじよう おも なら ゆめ  
は寤の本心を説きたもう。ただ、衆生の思い習わせる夢の

なか しんじ ゆえ ゆめ なか ごんご か うつつ ほんしん おし  
中の心地なるが故に、夢の中の言語を借りて寤の本心を訓

うるなり。故に、語は夢の中の言語なれども、意は寤の  
ことば ゆめ なか ごんご こころ うつつ

ほんしん おし ほけきよう もん しゃく こころ  
本心を訓う。法華経の文と釈との意かくのごとし。これ

あき し きよう もん しゃく もん かなら まよ  
を明らめ知らずんば、経の文と釈の文とに必ず迷うべき

なり。ただし、この化他の夢の中の法門も寤の本心に備わ

とくゆう ほうもん ゆめ なか おし と うつつ ところ

れる徳用の法門なれば、夢の中の教えを取って寤の心に

おき ゆえ しじゆうにねん ゆめ なか けた ほうべん ほうもん

撰むるが故に、四十二年の夢の中の化他・方便の法門も

みようほうれんげきよう うつつ ところ おき ところ ほか ほうな

妙法蓮華経の寤の心に撰まつて、心の外には法無し。

ほけきよう かいえ い たと しゆる たいかい おさ

これを法華経の開会とは云うなり。譬えば衆流を大海に納

むるがごときなり。

ほとけ しんぼうみよう しゅじよう しんぼうみよう にみよう と こ

仏の心法妙と衆生の心法妙と、この二妙を取つて己

しん おさ ゆえ ところ ほか ほうな こしん しんしよう

心に撰むるが故に、心の外に法無きなり。己心と心性と

しんたい みつ こしん ほんがく さんじんによらい きよう

心体との三つは、己身の本覚の三身如来なり。これを経に

と い によぜそう おうじんによらい によぜしやう ほうしんによらい

説いて云わく「如是相〈応身如来〉・如是性〈報身如来〉・

によぜたい ほんしんによらい さんによぜ い さんによぜ

如是体〈法身如来〉。これを三如是と云う。この三如是の

ほんがく によらい じつぼうほうかい しんたい じつぼうほうかい しんしよう

本覚の如来は、十方法界を身体となし、十方法界を心性と

じつぼうほうかい そつごう ゆえ わ み ほんがく さん

なし、十方法界を相好となす。この故に、我が身は本覚の三

じんによらい しんたい ほうかい しゅうへん いちぶつ とくよう

身如来の身体なり。法界に周遍して一仏の徳用なれば、

いっさいほう みな ぶつぼう と たま ととき ざせき つら

「一切法は皆これ仏法なり」と説き給いし時、その座席に列

もろもろ ししゆ はちぶ ちくしよう げどうとういちにん も みな

なりし諸の四衆・八部・畜生・外道等一人も漏れず、皆

もうぞう ひがめ ひがおも た どころ さんし ほんがく

ことごとく、妄想の僻目・僻思、立ち所に散止して、本覚

うつつ かえ みなぶつどう じよう

の寤に還って皆仏道を成ず。

ほとけ うつつ ひと しゆじよう ゆめみ ひと ゆえ

仏は寤の人のごとく、衆生は夢見る人のごとし。故に、

しょうじ

こむ

さ

ほんがく

うつつ

かえ

そくしんじようぶつ

生死の虚夢を醒まして本覺の寤に還るを、即身成仏とも、

びようどうだいえ

むふんべつほう

かいじようぶつどう

い

ひと

平等大慧とも、無分別法とも、皆成仏道とも云う。ただ一

ほうもん

じつぼう

ぶつど

まちまち

わ

つの法門なり。十方の仏土は区に分かれたりといえども、

つう

ほう

いちじよう

ほうべんな

ゆえ

むふんべつほう

じつかい

通じて法は一乘なり。方便無きが故に無分別法なり。十界

しゆじよう

しなしな

こと

じつそう

り

ひと

の衆生は品々に異なりといえども、実相の理は一つなるが

ゆえ

むふんべつ

ひやつかいせんによ

さんぜせけん

ほうもんこと

故に無分別なり。百界千如・三千世間の法門殊なりといえ

じつかいご

ゆえ

むふんべつ

ゆめ

うつつ

こ

じつ

ども、十界互具するが故に無分別なり。夢と寤と、虚と実

おのおのべつ

いっしん

なか

ほう

ゆえ

と、各別異なりといえども、一心の中の法なるが故に

むふんべつ

かこ

みらい

げんざい

みつ

無分別なり。過去と未来と現在とは三つなりといえども、

いちねん しんちゆう り むふんべつ  
一念の心中の理なれば無分別なり。

いっさいきよう ことば ゆめ なか ことば たと おうぎ き  
「一切経の語は夢の中の語」とは、譬えば扇と樹と

のごとし。 「法華経の寤の心を顕す言」とは、譬えば月  
ほげきよう うつつ ころ あらわ ことば たと つき

と風とのごとし。 故に、本覚の寤の心の月輪の光は無明  
かぜ ゆえ ほんかく うつつ ころ げつりん ひかり むみよう

の闇を照らし、実相般若の智慧の風は妄想の塵を払う故に、  
やみ て じつそうはんニヤ ちえ かぜ もうそう ちり はら ゆえ

夢の語の扇と樹とをもつて寤の心の月と風とを知らし  
ゆめ ことば おうぎ き うつつ ころ つき かぜ し

む。 この故に、夢の余波を散じて寤の本心に帰せしむるな  
ゆえ ことば ゆめ よは さん うつつ ほんしん き

り。

ゆえ しかん い つきちようざん かく おうぎ あ  
故に、止観に云わく「月重山に隠るれば扇を挙げてこ

れに類し、風大虚に息みぬれば樹を動かしてこれを訓うる

がごとし」文。弘決に云わく「真常性の月、煩惱の山に隠

る。煩惱は一つにあらず、故に名づけて重となす。円音教

の風は化を息めて寂に帰す。寂理無礙なること、なお大虚

のごとし。四依の弘教は扇と樹のごとし乃至月と風とを

知らしむるなり」已上。夢の中の煩惱の雲重 畳せること山

のごとく、その数八万四千の塵勞にて、心性本覚の月輪を

隠す。扇と樹のごとくなる経論の文字・言語の教えを

もつて、月と風のごとくなる本覚の理を覚知せしむる

しょうぎよう

ゆえ

もん

ことば

おうぎ

き

もん

聖教なり。故に、文と語とは扇と樹とのごとし文。

かみ

しゃく

いちおう

しゃく

じつぎ

つき

上の釈は一往の釈とて実義にあらざるなり。月のごと

みようほう

しんしょう

げつりん

かせ

わ

こころ

くなる妙法の心性の月輪と、風のごとくなる我が心の

はんにや

えげ

おし

みようほうれんげきよう

な

般若の慧解とを訓え知らしむるを、妙法蓮華経と名づく。

ゆえ

しゃくせん

い

しょうしき

ごんみよう

たず

むそう

ごくり

故に、釈籤に云わく「声色の近名を尋ねて無相の極理に

いた

いじよう

しょうしき

ごんみよう

おうぎ

き

至らしむ」已上。「声色の近名」とは、扇と樹とのごと

ゆめ

なか

いっさい

きようろん

ごんぜつ

むそう

ごくり

くなる夢の中の一切の経論の言説なり。「無相の極理」と

つき

かせ

うつつ

わ

み

しんしょう

じゃつこう

は、月と風とのごとくなる寤の我が身の心性の寂光の

ごくらく

極楽なり。



ごくらく

じつぼうほうかい

しやうほう

うじやう

じつぼうほうかい

えほう

この極楽とは、十方法界の正報の有情と十方法界の依報

ごくど

わごう

いったい

さんじんそくいち

しどふに

ほっしん

の国土と和合して一体なり。三身即一・四土不二の法身の

いちぶつ

じっかい

み

ほっしん

じっかい

こころ

一仏なり。十界を身となすは法身なり。十界を心となすは

ほうしん

じっかい

ぎやう

おうじん

じっかい

ほか

ほとけな

報身なり。十界を形となすは応身なり。十界の外に仏無く

ほとけ

ほか

じっかいな

えしやうふに

しんどふに

仏の外に十界無くして、依正不二なり、身土不二なり。

いちぶつ

しんたい

じやつごうど

い

ゆえ

むそう

ごく

一仏の身体なるをもつて寂光土と云う。この故に無相の極

り

しやうめつむじやう

そう

はな

ゆえ

むそう

い

理とは云うなり。生滅無常の相を離れたるが故に無相と云

ほっしやう

えんでい

げんしゆう

ごくじ

ゆえ

ごくり

い

うなり。「法性の淵底、玄宗の極地」なり。故に極理と云

むそう

ごくり

じやつごう

ごくらく

いつさいうじやう

しんしやう

う。この無相の極理なる寂光の極楽は、一切有情の心性の

なか あ しょうじょう むろ な みょうほう しん

中に有つて清浄・無漏なり。これを名づけて「妙法の心

れんだい い ゆえ こころ ほか べつ ほうな

蓮台」とは云うなり。この故に、「心の外に別の法無し」

い いっさいほう みな ぶつぼう つうだつ げりよう

と云う。これを「一切法は皆これ仏法なりと通達し解了す」

とは云うなり。

しょう し ふた ことわり しょうじ ゆめ ことわり もうぞう

生と死と二つの理は、生死の夢の理なり、妄想なり、

てんどう ほんがく うつつ わ しんしょう ただ しよう

顛倒なり。本覚の寤をもつて我が心性を糾せば、生ずべ

はじめも無きが故に、死すべき終わりも無し。既に生死を離

れたる心法にあらずや。劫火にも焼けず、水災にも朽ちず、

けんとう き きゆうせん い けし なか い

剣刀にも切られず、弓箭にも射られず。芥子の中に入れど

しんぼう ごうか や すいさい く

れたる心法にあらずや。劫火にも焼けず、水災にも朽ちず、

も、芥子も広からず、心法も縮まらず。虚空の中に満つれ

ども、虚空も広からず、心法も狭からず。

善に背くを悪と云い、悪に背くを善と云う。故に、心の

外に善無く悪無し。この善と悪とを離るるを無記と云うな

り。善・悪・無記、この外には心無く、心の外には法無き

なり。故に、善悪も、浄穢も、凡夫・聖人も、天地も、大小

も、東西南北・四維・上下も、言語の道断え、心行の所滅

す。心に分別して思い言い顕す言語なれば、心の外には

分別も無分別も無し。言と云うは、心の思いを響かして声

を顯すを云うなり。凡夫は我が心に迷つて、知らず覺ら

あらわ い

ぼんぷ わ

まよ

まよ

まよ

まよ

まよ

ざるなり。仏はこれを悟り顯して神通と名づくるなり。神

ずう

たましい

いつさい

ほう

つう

さわ

な

な

な

じざい

通とは、神の一切の法に通じて礙り無きなり。この自在の

じんずう

いつさい

うじよう

まごころ

さわ

な

な

な

じざい

神通は、一切の有情の心にてあるなり。故に、狐狸も分々

つう

げん

みな

まごころ

たましい

ぶんぶん

まごころ

に通を現ずること、皆、心の神の分々の悟りなり。この

まごころ

いつぼう

まごころ

しゅつたい

心の一法より国土世間も出来することなり。

いちだいししやうぎやう

まごころ

はちまんしせん

一代聖教とは、この事を説きたるなり。これを八万四千

ほうぞう

い

みな

ひとり

しんちゆう

ほうもん

の法蔵とは云うなり。これ皆ことごとく一人の身中の法門

はちまんしせん

ほうぞう

わ

みひとり

にてあるなり。しかれば、八万四千の法蔵は我が身一人の

につきもんじよ

はちまんほうぞう

わ

しんちゆう

はら

たも

いだ

日記文書なり。この八万法蔵を我が心中に孕み持ち、懐き

たも

わ

しんちゆう

こころ

ほとけ

ほう

じょうど

わ

持ちたり。我が身中の心をもつて、仏と法と浄土とを我

み

ほか

おも

ねが

もと

まよ

い

こころ

が身より外に思い願い求むるを迷いとは云うなり。この心

ぜんあく

えん

あ

ぜんあく

ほう

つく

い

が、善悪の縁に値つて善悪の法をば造り出だせるなり。

けごんきよう

い

こころ

たく

えし

しゆじゆ

ごおん

つく

華嚴経に云わく「心は工みなる画師の種々の五陰を造る

いっさいせけん

なか

ほう

つく

こころ

がごとく、一切世間の中に法として造らざることなし。心

ほとけ

ほとけ

しゆじよう

のごとく仏もまたしかなり。仏のごとく衆生もしかなり。

さんがい

いっしん

こころ

ほか

べつ

ほうな

こころ

ほとけ

三界は、ただ一心なり。心の外に別の法無し。心、仏お

しゆじよう

みつ

さべつな

いじよう

むりようぎきよう

い

よび衆生、この三つは差別無し」已上。無量義経に云わく

そくな そう いっぽう ぶりようぎ しゅつしよう いじよう そう

「相無く相ならざる一法より無量義を出生す」已上。「相

な そう いっぽう いっさいしゅじよう いちねん こころ

無く相ならざる一法」とは、一切衆生の一念の心これな

もんぐ しゃく い しょうめつむじよう そくな ゆえ

り。文句に釈して云わく「生滅無常の相無きが故に、『相

な い にじよう うよ むよ ふた ねはん そう はな

無し』と云うなり。二乗の有余・無余の二つの涅槃の相を離

ゆえ そう い うんぬん こころ ふしぎ

るるが故に、『相ならず』と云うなり」云々。心の不思議を

きようろん せんよう

もつて経論の詮要となすなり。

こころ さと し な によらい い さと し

この心を悟り知るを名づけて如来と云う。これを悟り知

のち じっかい わ み わ こころ わ ぎよう

つて後は、十界は我が身なり、我が心なり、我が形なり。

ほんかく によらい わ しんしん ゆえ し とぎ

本覚の如来は我が身心なるが故なり。これを知らざる時を

な むみよう むみよう あき よ

名づけて無明となす。無明は「明らかなることなし」と読む

わ こころ あ よう あき さと さと

なり。我が心の有り様を明らかに覺らざるなり。これを悟

し とき な ほつしよう い ゆえ むみよう ほつしよう

り知る時を名づけて法性と云う。故に、無明と法性とは

いっしん いみよう みようごん ふた こころ ひと

一心の異名なり。名言は二つなりといえども、心はただ一

こころ よ むみよう だん

つ心なり。これに由つて、無明をば断ずべからざるなり。

ゆめ こころ むみよう だん うつつ こころ うしな ゆえ

夢の心の無明なるを断ぜば、寤の心を失うべきが故な

そう えんぎよう こころ いちごう わく だん ゆえ いっさいほう

り。総じて円教の意は一毫の惑をも断ぜず。故に、「一切法

みな ぶつほう

は皆これ仏法なり」と云うなり。

ほげきよう い によせそう いっさいしゆじよう そうごう ほんがく おうじん

法華經に云わく「如是相へ一切衆生の相好、本覺の応身

によらい によぜしよう いつさいしゆじよう しんしよう ほんがく ほうしんによらい によぜたい  
如来。如是性一切衆生の心性、本覺の報身如来。如是体

いつさいしゆじよう しんたい ほんがく ほっしんによらい さんによぜ のち

一切衆生の身体、本覺の法身如来」。この三如是より後

しちによぜしゆつしよう がつ じゆうによぜ な じゆうによぜ

の七如是出生して、合して十如是と成るなり。この十如是

じつぼうかい じつぼうかい ひとり こころ い

は十法界なり。この十法界は一人の心より出でて、

はちまんしせん ほうもん な ひとり てほん いつさいしゆじよう

八万四千の法門と成るなり。一人を手本として一切衆生

びようどう さんぜ しょぶつ そうかんもん

平等なること、かくのごとし。三世の諸仏の總勘文にして、

ごほん する しょうほん もんじよ ほとけ ごほん

御判たしかに印したる正本の文書なり。仏の御判とは

じつそう いちいん いん はん いみよう よ いつさい きよう

実相の一印なり。印とは判の異名なり。余の一切の経には

じつそう いんな しょうほん もんじよ まった じつ ほとけな

実相の印無ければ、正本の文書にあらず。全く実の仏無



し。実じつの仏ほとけ無なきが故ゆえに、夢ゆめの中なかの文書もんじよなり。浄土じようどに無なきが

故ゆえなり。

じつぽうかい じゆう

十法界じゆうぽうかいは十じゆうなれども、十如是じゆうによぜは一つひとなり。譬たとえば、水中すいちゆう

つき むりよう

の月つきは無量むりようなりといえども、虚空こくうの月つきは一つひとなるがごとし。

くほうかい じゆうによぜ

九法界くほうかいの十如是じゆうによぜは、夢ゆめの中なかの十如是じゆうによぜなるが故ゆえに、水中すいちゆうの月つき

ぶつぽうかい

のごとし。仏法界ぶつぽうかいの十如是じゆうによぜは、本覺ほんがくの寤うつの十如是じゆうによぜなれば、

こくう つき

虚空こくうの月つきのごとし。この故ゆえに、仏界ぶつがいの一つひとの十如是じゆうによぜは顕あらわれぬ

くほうかい じゆうによぜ

れば、九法界くほうかいの十如是じゆうによぜの水中すいちゆうの月つきのごときも一つひとも闕減けつげん無な

どうじ みなあらわ

く同時どうじに皆みな顕あらわれて、体たいと用ゆうと一具いちぐにして一体いったいの仏ほとけと成なる。

じつぼうかい たが ぐそく びようどう じつかい しゅじょう

十法界を互いに具足して平等なる十界の衆生なれば、

こくう ほんげつ すいちゆう まつげつ いちにん しんちゆう ぐそく か

虚空の本月も水中の末月も一人の身中に具足して闕くる

ゆえ じゅうによぜ ほんまつくきよう ひと さべつな ほん

ことなし。故に、十如是は本末究竟して等しく差別無し。本

しゅじょう じゅうによぜ まつ しよぶつ じゅうによぜ しよぶつ

とは衆生の十如是なり。末とは諸仏の十如是なり。諸仏は

しゅじょう いちねん こころ あらわ たま しゅじょう ほん

衆生の一念の心より顕れ給えば、衆生はこれ本なり、

しよぶつ まつ

諸仏はこれ末なり。

きよう い いま さんがい みな わ う

しかるを、経に云わく「今この三界は、皆これ我が有な

なか しゅじょう わ こ いじょう

り。その中の衆生は、ことごとくこれ吾が子なり」已上。

ほとけじようどう のち けた ゆえ しやく じようどう とな

仏成道の後に、化他のための故に迹の成道を唱えて、

しょうじ ゆめ なか ほんがく うつつ と ちえ ちち  
生死の夢の中にして本覚の寤を説きたもうなり。智慧を父

たと ぐち こ たと と たま  
に譬え、愚癡を子に譬えて、かくのごとく説き給えるなり。

しゅじょう ほんがく じゅうによぜ いちねん むみようねむ

衆生は本覚の十如是なりといえども、一念の無明眠りのご

こころ おお しょうじ ゆめ い ほんがく ことわり わす かみすじ

とく心を覆い、生死の夢に入つて本覚の理を忘れ、髮筋

き かこ げんざい みらい さんぜ こむ み ほとけ

を切るほどに過去・現在・未来の三世の虚夢を見るなり。仏

うつつ ひと しょうじ ゆめ い しゅじょう おどろ

は寤の人のごとくなれば、生死の夢に入つて衆生を驚か

たま ちえ ゆめ なか ふぼ ゆめ なか われ

し給える智慧は、夢の中にて父母のごとく、夢の中なる我ら

しそく どうり

は子息のごとくなり。この道理をもつて「ことごとくこれ吾

こ のたま ことわり おも ほど しよぶつ われ

が子なり」と言うなり。この理を思い解けば、諸仏と我

らとは本の故にも父子なり、末の故にも父子なり。父子の

てんしょう ほんまつ おな よ こしん ぶっしん こと

天性は本末これ同じ。これに由つて己心と仏心とは異なら

かん ゆえ しょうじ ゆめ さ ほんがく うつつ かえ

ずと観ずるが故に、生死の夢を覚まして本覚の寤に還るを、

そくしんじようぶつ い そくしんじようぶつ いま わ み うえ

即身成仏と云うなり。即身成仏は、今、我が身の上の

てんしょう じたい わずら な さわ な しゅじよう うんめい

天性・地体なり。煩いも無く、障りも無し。衆生の運命

かほう みようが

なり、果報なり、冥加なり。

そ おも ゆめ とき こころ まよ たと うつつ とき

夫れ以んみれば、夢の時の心を迷いに譬え、寤の時の

こころ さと たと いちだいししようぎよう かくご

心を悟りに譬う。これをもつて一代聖教を覚悟するに、

あとかた な こむ み こころ くる あせみず な おどろ

跡形も無き虚夢を見て心を苦しめ、汗水を成して驚きぬ

れば、我が身も家も臥所も一所にて異ならず、夢の虚と寤

の実との二事を目にも見、心にも思えども、所もただ一所

なり、身もただ一身なり。二つの虚と実との事有るは、こ

れをもつて知るべし。九界生死の夢見る我が心も仏界

常住の寤の心も異ならず。九界生死の夢見る所が仏界

常住の寤の所にて変わらず。心法も替わらず、在所も差

わざれども、夢は皆虚事なり、寤は皆実事なり。

止観に云わく「昔莊周というもの有り。夢に胡蝶と成つ

て一百年を経たり。苦は多く楽は少なく、汗水を成して驚

きぬれば、胡蝶にも成らず百年をも経ず、苦も無く楽も無

みなこじ みなもうそう いじようしゆい ぐけつ い むみよう

し。皆虚事なり。皆妄想なり」已上取意。弘決に云わく「無明

ゆめ ちよう さんぜん ひやくねん いちねんじつな

は夢の蝶のごとく、三千は百年のごとし。一念実無きは

ちよう さんぜん ひやくねん な とし つ

なお蝶にあらざるがごとく、三千もまた無きこと年を積む

いじよう しやく そくしんじようぶつ しやうこ

にあらざるがごとし」已上。この釈は即身成仏の証拠な

ゆめ ちよう な とき そうしゆう こと うつつ ちよう な

り。夢に蝶と成る時も莊周は異ならず、寤に蝶と成ら

おも とき べつ そうしゆうな わ み しやうじ ほんぷ おも

ずと思う時も別の莊周無し。我が身を生死の凡夫なりと思

とき ゆめ ちよう な ひがめ ひがおも わ

う時は、夢に蝶と成るがごとく、僻目・僻思いなり。我が

み ほんがく によらい おも とき もと そうしゆう

身は本覚の如来なりと思う時は、本の莊周なるがごとし。

そくしんじようぶつ

ちよう み

じようぶつ

い

即身成仏にして、蝶の身をもつて成仏すと云うにはあら

ちよう

おも

こじ

じようぶつ

ことばな

さた

ざるなり。蝶と思うは虚事なれば、成仏の言無し。沙汰

ほか

むみよう

ゆめ

ちよう

はん

われ

の外のことなり。無明は夢の蝶のごとしと判ずれば、我ら

ひがおも

きのう

ゆめ

しよう

たいな

もうそう

が僻思いはなお昨日の夢のごとく、性・体無き妄想なり。

たれ

ひと

こむ

しようじ

しんじゆ

うたが

じようじゆうねはん

ぶつしよう

誰の人か虚夢の生死を信受して疑いを常住涅槃の仏性

しよう

に生ぜんや。

しかん

い

むみようちわく

もと

ほつしよう

ちめい

止観に云わく「無明癡惑、本よりこれ法性なり。癡迷を

ゆえ

ほつしようへん

むみよう

な

もろもろ

てんどう

ぜん

もつての故に、法性変じて無明と作り、諸の顛倒の善・

ふぜんとう

お

かんきた

みず

むす

へん

けんびよう

な

不善等を起こす。寒来つて水を結べば変じて堅氷と作るが

ごとく、また眠り来つて心を変ずれば種々の夢有るがごと

いままさ

もろもろ

てんどう

すなわ

ほつしよう

いち

こと

し。今当に諸の顛倒は即ちこれ法性にして一ならず異

たい

てんどうきめつ

せんかりん

ならずと体すべし。顛倒起滅すること旋火輪のごとしとい

てんどう

きめつ

しん

ごころ

えども、顛倒の起滅を信ぜずして、ただこの心ただこれ

ほつしよう

しん

き

ほつしよう

き

めつ

ほつしよう

めつ

法性なりと信ず。起はこれ法性の起、滅はこれ法性の滅

じつ

きめつ

きめつ

おも

たい

なり。それ実には起滅せざるをみだりに起滅すと謂うと体

もうぞう

さ

ほつしよう

ほつしよう

す。ただ妄想を指すにことごとくこれ法性なり。法性を

ほつしよう

か

ほつしよう

ほつしよう

ねん

つね

もつて法性に繋げ、法性をもつて法性を念ず。常にこれ

ほつしよう

ほつしよう

ときな

いじよう

法性なり。法性ならざる時無し」已上。かくのごとく、



ほつしよう

とき

ひま

な

ことわり

ほつしよう

ゆめ

ちよう

法性ならざる時の隙も無き理の法性に、夢の蝶のごと

むみよう

じつう

おも

しよう

まよ

くなる無明において実有の思いを生じてこれに迷うなり。

しかん

く

い

たと

ねむ

ほう

こころ

おほ

いちなん

止観の九に云わく「譬えば、眠りの法、心を覆つて、一念

むりようせ

じ

ゆめ

ないし

じゃくめつしんによ

なん

の中に無量世の事を夢みるがごとし」乃至「寂滅真如に何

じい

あ

ないし

いっさいしゆじようすなわ

だいねほん

めつ

の次位か有らん」乃至「一切衆生即ち大涅槃なり。また滅

なん

じい

こうげ

だいしようあ

ふしようぶしよう

すべからず。何の次位・高下・大小有らんや。不生不生に

ふかせつ

いんねんあ

ゆえ

と

して不可説なれども、因縁有るが故に、また説くことを得べ

じゆういんねん

ほう

しよう

いん

な

こくう

えが

ほうべん

し。十因縁の法、生のために因と作る。虚空に画き方便も

き

う

いっさい

くらい

と

いじよう

て樹を種うるがごとく、一切の位を説くのみ」已上。

じつぼうかい えほう しょうほう ほっしん ほとけ いったいさんじん とく

十法界の依報・正報は法身の仏の一体三身の徳なりと

し いっさいほう みな ぶつぼう つうだつ げりよう

知つて、「一切法は皆これ仏法なり」と通達し解了する、こ

みようじそく みようじそく くらい そくしんじようぶつ ゆえ

れを名字即となす。名字即の位より即身成仏す。故に、

えんどん きよう じい しだいな ゆえ げんぎ い まっだい

円頓の教には次位の次第無し。故に、玄義に云わく「末代

がくしゃ おお きようろん ほうべん だんぶく しゆう じようとう みず しょう

の学者、多く経論の方便の断伏を執して諍鬪す。水の性

ひ の

の冷ややかなるがごときも、飲まずんばいずくんぞ知らん」

いじよう てんたい ほん い じい こうもく にんのう ようらく よ

已上。天台の判に云わく「次位の綱目は仁王・瓔珞に依り、

だんぶく こうげ だいぼん ちろん よ いじよう にんのう ようらく だいぼん

断伏の高下は大品・智論に依る」已上。仁王・瓔珞・大品・

だいちどろん きようろん みな ほっけいぜん はつきよう きようろん

大智度論、この経論は皆、法華已前の八教の経論なり。

ごんきよう ぎよう むりようごう へ しょうしん じい くらい

権教の行は無量劫を経て昇進する次位なれば、位の

しだい と いま ほっけ はつきよう こ えん そくしつ

次第を説けり。今の法華は八教に超えたる円なれば速疾

とんじよう こころ ほとけ しゅじよう みつ わ いちねん

頓成にして、心と仏と衆生と、この三つは我が一念の

しんちゆう おさ こころ ほか な かん げこん ぎようじゃ

心中に摂めて心の外に無しと観ずれば、下根の行者すら、

いっしよう うち みようかく くらい い いち た そうそく

なお一生の中に妙覚の位に入る。一と多と相即すれば、

ひと くらい いっさい くらいみな ぐそく ゆえ いっしよう い

一つの位に一切の位皆これ具足せり。故に一生に入るな

げこん ちゆうこん もの

り。下根すら、かくのごとし。いわんや中根の者をや。い

じようこん じっそう ほか べつ ほうな

かにいわんや上根をや。実相の外にさらに別の法無し。

じっそう しだい な ゆえ くらい な

実相には次第無きが故に位無し。

そう いちだい しょうぎよう ひとり ほう  
総じて一代の聖教は一人の法なれば、我が身の本体を  
よ よ し さと ほとけ い まよ  
能く能く知るべし。これを悟るを仏と云い、これに迷うは  
しゅじよう けこんきよう もん こころ  
衆生なり。これは華嚴經の文の意なり。

ぐけつ ろく い み なか てんち なら  
弘決の六に云わく「この身の中につぶさに天地に倣うこ

し し こうべ まじど てん かたど あし ほう  
とを知る。知んぬ、頭の円かなるは天に象り、足の方な

ち かたど み うち こうしゆ すなわ こくう たら  
るは地に象り、身の内の空種なるは即ちこれ虚空なり。腹

あたた はるなつ のつと せ こわ あきふゆ のつと したい  
の温かなるは春夏に法り、背の剛きは秋冬に法り、四体

しじ のつと だいせつ じゆうに じゆうにがつ のつと しょうせつ  
は四時に法り、大節の十二は十二月に法り、小節の

さんびやくろくじゆうさんびやくろくじゆうにち のつと はな いき でい さんたく  
三百六十は三百六十日に法り、鼻の息の出入りは山沢

けいこく なか かぜ のつと くち いき でい こくう なか かぜ  
溪谷の中の風に法り、口の息の出入りは虚空の中の風に  
のつと まなこ にちがつ のつと かいへい ちゆうや のつと かみ せいしん

法り、眼は日月に法り、開閉は昼夜に法り、髪は星辰に  
のつと まゆ ほくと のつと みやく こうが のつと ほね ぎよくせき

法り、眉は北斗に法り、脈は江河に法り、骨は玉石に  
のつと ひにく じど のつと け そうりん のつと ごぞう てん

法り、皮肉は地土に法り、毛は叢林に法り、五臓は天に  
あ ごせい のつと ち あ ごかく のつと いんよう あ

在っては五星に法り、地に在っては五岳に法り、陰陽に在  
ごぎよう のつと よ あ ごじよう のつと うち あ

つては五行に法り、世に在っては五常に法り、内に在つ  
ごじん のつと ぎよう しゅ ごとく のつと つみ じ

ては五神に法り、行を修するには五徳に法り、罪を治す  
ごけい のつと い ぼく ぎ ひ きめう たいへき

るには五刑に法る。謂わく墨・劓・剕・宮・大辟なりへこ  
ごけい ひと ようよう いた ぼく ぎ ひ きめう たいへき

の五刑は人を様々にこれを傷ましむ。その数三千の罰有り。  
かずさんぜん ばちあ

これを五刑と云う。主領には五官となす。五官は下の第八の卷に博物志を引くがごとし。謂わく句芒等なり。天に昇つては五雲と曰い、化して五竜となる。心を朱雀となし、腎を玄武となし、肝を青竜となし、肺を白虎となし、脾を勾陳となす。

また云わく「五音・五明・六芸、皆これより起こる。ま

た当に内治の法を識るべし。覚心は内に大王となつて

百重の内に居し、出でては則ち五官に侍衛せらる。肺を

司馬となし、肝を司徒となし、脾を司空となし、四支を民子

となし、左を司命となし、右を司録となし、人の命を主司  
となし、左を司命となし、右を司録となし、人の命を主司  
る。乃至、臍を太一君となす等と。禅門の中に広くその相を  
明かす」已上。

人身の本体委しく検すれば、かくのごとし。しかるに、

この金剛不壊の身をもつて生滅無常の身なりと思ふ僻思

いは、「譬えば莊周が夢の蝶のごとし」と釈し給えるな

り。五行とは地水火風空なり。五大種とも、五蘊とも、五戒

とも、五常とも、五方とも、五智とも、五時ともいう。た

だ一つの物にして経々の異説なり。内典・外典の名目の

いみよう

こんきよう

かい

いつさいしゆじよう

しんちゆう

ご

異名なり。今経にこれを開して一切衆生の心中の五

ぶつしよう

ごち

によらい

しゆし

と

すなわ

仏性・五智の如来の種子なりと説けり。これ則ち

みようほうれんげきよう

ごじ

ごじ

じんしん

たい

つく

妙法蓮華経の五字なり。この五字をもつて人身の体を造る

ほんぬじようじゆう

ほんがく

によらい

じゆうによぜ

い

なり。本有常住なり、本覚の如来なり。これを十如是と云

ほとけ

ほとけ

よ

くじん

う。これを「ただ仏と仏とのみ、いまし能く究尽したま

い

ふたい

ぼさつ

ごっか

にじよう

しようぶん

し

えり」と云う。不退の菩薩と極果の二乗と、少分も知らざ

ほうもん

えんどん

ぼんぷ

しよしん

し

る法門なり。しかるを円頓の凡夫は初心よりこれを知るが

ゆえ

そくしんじようぶつ

こんごうふえ

たい

故に、即身成仏するなり。金剛不壊の体なり。

あき

し

てんくず

わ

み

くず

ここをもつて明らかに知るべし。天崩れば我が身も崩る



べし。地裂けば我が身も裂くべし。地水火風滅亡せば我が身

ち　　さ　　わ　　み　　さ　　ち　　す　　い　　か　　ふ　　う　　め　　つ　　ぼ　　う　　わ　　み

め　　つ　　ぼ　　う　　ご　　だ　　い　　し　　ゆ　　か　　こ　　げ　　ん　　ざ　　い

ご　　だ　　い　　し　　ゆ　　か　　こ　　げ　　ん　　ざ　　い

ご　　だ　　い　　し　　ゆ　　か　　こ　　げ　　ん　　ざ　　い

もまた滅亡すべし。しかるに、この五大種は、過去・現在・

み　　ら　　い　　さ　　ん　　ぜ　　か　　ご　　だ　　い　　し　　ゆ　　か

ご　　だ　　い　　し　　ゆ　　か

か

未来の三世は替わるといえども、五大種は替わることなし。

し　　よ　　う　　ほ　　う　　ぞ　　う　　ほ　　う　　ま　　つ　　ぼ　　う　　さ　　ん　　じ　　こ　　と

ご　　だ　　い　　し　　ゆ

正法と像法と末法との三時殊なりといえども、五大種はこ

ひ　　と　　せ　　い　　す　　い　　て　　ん　　ぺ　　ん　　な

れ一つにして盛衰・転変無し。

や　　く　　そ　　う　　ゆ　　ほ　　ん　　し　　よ　　え　　ん　　ぎ　　よ　　う　　り　　だ　　い　　ち　　え　　ん　　ど　　ん　　き　　よ　　う　　く　　う

し　　よ

え　　ん　　ぎ　　よ　　う

り

だ　　い　　ち

え　　ん　　ど　　ん

き　　よ　　う

く　　う

薬草喻品の疏には「円教の理は大地なり。円頓の教は空

あ　　め　　さ　　ん　　ぞ　　う　　き　　よ　　う　　つ　　う　　ぎ　　よ　　う　　べ　　つ　　き　　よ　　う　　さ　　ん　　ぎ　　よ　　う　　さ　　ん　　そ　　う　　に　　も　　く

さ　　ん　　ぞ　　う　　き　　よ　　う

つ　　う　　ぎ　　よ　　う

べ　　つ　　き　　よ　　う

さ　　ん　　ぎ　　よ　　う

さ　　ん　　そ　　う

に　　も　　く

の雨なり。また三蔵教・通教・別教の三教は、三草と二木

ゆ　　え　　そ　　う　　も　　く　　え　　ん　　り　　だ　　い　　ち　　し　　よ　　う

そ　　う　　も　　く

え　　ん　　り

だ　　い　　ち

し　　よ　　う

となり。その故は、この草木は、円理の大地より生じて

え　　ん　　ぎ　　よ　　う　　く　　う　　あ　　め　　や　　し　　な　　ご　　じ　　よ　　う　　そ　　う　　も　　く　　さ　　か　　て　　ん　　ち

く　　う

あ　　め

や　　し　　な

ご　　じ　　よ　　う

そ　　う　　も　　く

さ　　か

て　　ん　　ち

円教の空の雨に養われて五乗の草木は栄うれども、天地

よ われさか おも し よ ゆえ さんきよう  
に依つて我榮えたりと思ひ知らざるに由るが故に、二三教の  
にんてん にじよう ぼさつ そうもく たと と ふちおん  
人天・二乗・菩薩をば草木に譬えて説きたり。不知恩なる  
ゆえ そうもく な う いま ほつけ はじ ごじよう そうもく  
が故に、草木の名を得。今、法華に始めて、五乗の草木は、  
えんり はは えんきよう ちち し いちじ う  
円理の母と円教の父とを知るなり。『一地の生むところ』  
なれば母の恩を知るがごとく、『一雨の潤すところ』なれ  
ちち おん し やくそうゆほん こころ  
ば父の恩を知るがごとし。薬草喩品の意、かくのごとく  
なり。

しやかによらい ごひやくじんてんごう そのかみ ぼんぷ おわ とき  
釈迦如来、五百塵点劫の当初、凡夫にて御坐しませし時、  
わ み ちすいかふうくう し そくぎ さと ひら  
我が身は地水火風空なりと知ろしめして即座に悟りを開き

のち けた

せ ぜばんばん

しゆつせ

じようどう

ざいざい

たまいき。後に化他のために世々番々に出世・成道し、在々

しよしよ

はつそうさぶつ

おうぐう

たんじよう

じゆげ

じようどう

はじ

処々に八相作仏し、王宮に誕生し、樹下に成道して、始め

ほとけ

な

よう

しゆじよう

みし

しじゆうよねん

ほうべん

おし

て仏に成る様を衆生に見知らしめ、四十余年に方便の教

もう

しゆじよう

ゆういん

のち

ほうべん

もろもろ

きようぎよう

す

えを儲け衆生を誘引す。その後、方便の諸の経教を捨

しようじき

ごち

によらい

しゆし

り

と

てて、正直の妙法蓮華経の五智の如来の種子の理を説き

あらわ

なか

しじゆうにねん

ほうべん

しよきよう

まる

い

顕して、その中に四十二年の方便の諸経を丸かし納れて

いちぶつじよう

がん

にんいち

ほう

な

いちにん

かみ

ほう

たにん

一仏乗と丸じ、一人の法と名づく。一人が上の法なり。多人

いろ

まさ

もんじよ

つく

たし

ごはん

いん

の綺えざる正しき文書を造つて慥かなる御判の印あり。

さんぜ

しよぶつ

てつ

もんじよ

しやかぶつ

そうでん

とき

三世の諸仏の手継ぎの文書を釈迦仏より相伝せられし時

に、三千三百万億那由他の国土の上の虚空の中に満ち塞が

れるそこばくの菩薩たちの頂を摩で尽くして、時を指し

て末法近来の我ら衆生のためにたしかにこの由を説き聞

かせて、仏の譲り状をもつて「末代の衆生にたしかに

授与すべし」と、慇懃に三度まで同じ御語に説き給いしか

ば、そこばくの菩薩たち各数を尽くして躬を曲げ頭を低

れ、三度まで同じ言に、各、「我も劣らじ」と事請けを申

し給いしかば、仏心安く思しめして本覚の都に還りたも

う。三世の諸仏の説法の儀式・作法には、ただ同じ御言に時

さんぜんさんびやくまんおくな ゆた こくど うえ こくう なか み ふさ

ぼさつ いただき な っ とき さ

まつぼうこのころ われ しゅじょう よし と き

ほとけ まも じょう まっだい しゅじょう

じゅよ おんごん さんど おな みこと と たま

ぼさつ おのおのしゅ っ み ま こうべ た

さんど おな ことば おのおの われ おと ことう もう

たま ほとけこのころやす おぼ ほんがく みやこ かえ

さんぜ しょぶつ せつぼう ぎしき さほう おな みこと とき

まつだい ゆず じょう いつころ のち ごとひやくさい

を指したる末代の譲り状なれば、ただ一向に後の五百歳を

さ みようほうれんげきよう じようぶつ とき

指して、「この妙法蓮華経をもつて成仏すべき時なり」と、

ゆず じょう おもて の てつ しょうもん

譲り状の面に載せられたる手継ぎ証文なり。

あんらくぎようほん まつぼう い このごろ しょうしん ほんぶ ほけきよう

安樂行品には、末法に入つて近來の初心の凡夫、法華経

しゆぎよう じようぶつ よう と お

を修行して成仏すべき様を説き置かれしなり。身

あんらくぎよう くあんらくぎよう いあんらくぎよう じぎよう さんごう せいがんあんらく

安樂行・口安樂行・意安樂行の自行の三業も、誓願安樂

けた ぎよう おな のち まっせ ほうめつ ほつ とき

の化他の行も、同じく「後の末世の法滅せんと欲せん時に

うんぬん このころ とき いじよう ししよ あ

おいて」云々。これは近來の時なり。已上、四所に有り。

やくおうほん にしよ と かんぼつほん さんしよ と みな

藥王品には二所に説かれ、勸發品には三所に説かれたり。皆、

このころ さ ゆず お まさ もんじよ もち  
近來を指して譲り置かれたる正しき文書をば用いずして、  
ぼんぷ ことば つ ぐち こころ まか さんぜ しよぶつ ゆず  
凡夫の言に付き、愚癡の心に任せて、三世の諸仏の譲り  
じよう そむ たてまつ なが ぶつぼう そむ さんぜ しよぶつ  
状に背き奉り、永く仏法に背けば、三世の諸仏いかに  
ほいな くちお こころう なげ かな おぼ  
本意無く口惜しく、心憂く、歎き悲しみ思しめすらん。  
ねはんぎよう い ほう よ ひと よ うんぬん いた  
涅槃經に云わく「法に依つて人に依らざれ」云々。痛まし  
いかな、悲しいかな、末代の学者、仏法を習学して還つて  
ぶつぼう めつ  
仏法を滅す。

ぐけつ かな い えんどん き すうちよう  
弘決にこれを悲しんで曰わく「この円頓を聞いて崇重せ  
まこと きんだい だいじよう なら もの ぞうらん よ ゆえ  
ざるは、良に近代に大乘を習う者の雜濫に由るが故なり。

ぞうまつ じょううす しんじんかはく

いわんや、像末は情澆く信心寡薄にして、円頓の教法蔵に

あふ はこ み しゆい すなわ みようもく いた

溢れ函に盈つれども、しばらくも思惟せず、便ち瞑目に至

しょう し いた なん いた

る。いたずらに生じ、いたずらに死す。一に何ぞ痛ましき

いじよう どうし い えんどん おし もとぼんぷ

や「已上。同四に云わく「しかるに、円頓の教えは本凡夫に

こうむ ぼん やく ぎ ほとけなん みずか

被らしむ。もし凡を益するに擬せずんば、仏何ぞ自ら

ほっしょう ど じゆう ほっしょう み もろもろ ぼさつ

法性の土に住して、法性の身をもつて諸の菩薩のため

えんどん と なん もろもろ ほっしん ぼさつ

にこの円頓を説かざるや。何ぞ諸の法身の菩薩のために

ぼんしん しめ さんがい げん もち ないし

凡身を示し、この三界に現じたもうことを須いんや乃至

いっしんぼん あ すなわ しゆじゆう いじよう

一心凡に在れば、即ち修習すべし「已上。

せん

こしん

ぶっしん

いち

かん

すみ

詮ずるところ、己心と仏身と一なりと観ずれば、速やか

ほとけ

な

ゆえ

ぐけつ

い

いつさい

しよぶつ

に仏に成るなり。故に、弘決にまた云わく「一切の諸仏、

こしん ぶっしん こと

かん

よ

ゆえ

ほとけ

な

己心は仏心と異ならずと観じたもうに由るが故に、仏に成

え

いじよう

かんじん

い

まこと

こしん

ることを得たもう「已上。これを観心と云う。実に己心と

ぶっしん

いっしん

さと

りんじゆう

さまた

あくごう

あ

仏心と一心なりと悟れば、臨終を礙ぐべき悪業も有らず、

しやうじ

とど

もうねん

あ

いつさいほう

みな

ぶつぼう

生死に留むべき妄念も有らず。「一切法は皆これ仏法なり」

し

きやうくん

ぜんちしき

い

おも

と知りぬれば、教訓すべき善知識も入るべからず。思うと

おも

い

い

ふるま

ふるま

ぎやうじゆうぎ

が

思い、言うと言い、なすとなし、儀うと儀う行住坐臥の

しいぎ

しよさ

みな

ほとけ

みこころ

わごう

いったい

とが

四威儀の所作は、皆、仏の御心と和合して一体なれば、過



も無く障りも無き自在の身と成る。これを自行と云う。

かくのごとく自在なる自行の行を捨てて、あとかた あ 跡形も有らざ

る無明・妄想なる僻思いの心に住して三世の諸仏の教訓

に背き奉れば、冥きより冥きに入り、永く仏法に背くこ

と、悲しむべし、悲しむべし。只今こそ打ち返し、思い直し、

悟り返せば、即身成仏は我が身の外には無しと知りぬ。

我が心の鏡と仏の心の鏡とは、ただ一つの鏡なり

といえども、我らは裏に向かつて我が性の理を見ず。故に

無明と云う。如来は面に向かつて我が性の理を見たまえ

り。故に、明と無明とはその体ただ一つなり。鏡は一つ

かがみ

む

よう

みよう

まい

さべつあ

の鏡なりといえども、向かい様によつて明・昧の差別有り。

かがみ うらあ

おもて

さわ

な

む

よう

鏡に裏有りといえども、面の障りと成らず。ただ向かい様

とくしつ

ふた

あ

そうそくゆうずう

いっぽう

にぎ

け

によつて得失の二つ有り。相即融通して一法の二義なり。化

た ほうもん

かがみ

うら

む

じぎよう

かんじん

かがみ

他の法門は鏡の裏に向かうがごとく、自行の觀心は鏡の

おもて む

けた

とき

かがみ

じぎよう

とき

かがみ

面に向かうがごとし。化他の時の鏡も自行の時の鏡も、

わ しんしよう

かがみ

ひと

か

かがみ

そく

我が心性の鏡はただ一つにして替わることなし。鏡を即

しん たと

おもて

む

じようぶつ

たと

うら

む

身に譬え、面に向かうをば成仏に譬え、裏に向かうをば

しゆじよう

たと

かがみ

うらあ

ししようあく

だん

たと

うら

衆生に譬う。鏡に裏有るをば性悪を断ぜざるに譬え、裏

む とき おもて とくな けた くどく たと  
に向かう時、面の徳無きをば化他の功德に譬うるなり。

しゅじょう ぶつじょう あらわ たと  
衆生の仏性の顕れざるに譬うるなり。

じぎよう けた とくしつ りきゆう げんぎ いち い さつば  
自行と化他とは得失の力用なり。玄義の一に云わく「薩婆

しった そおう ゆみ ひ み な りき  
悉達の、祖王の弓を彎き満つるを名づけて力となし、七つ

てっこ あた ひと てっちせん つらぬ ち とお すいりん とお  
の鉄鼓に中り、一つの鉄圀山を貫き、地を洞して水輪に徹

な ゆう じぎよう りきゆう もろもろ  
るを名づけて用となすがごとし（自行の力用なり）。諸の

ほうべんきよう りきゆう みみやく ぼんぷ きゆうせん なに  
方便教は、力用の微弱なること、凡夫の弓箭のごとし。何

むかし えん けた にち う て  
となれば、昔の縁は化他の二智を稟けて、理を照らすこと

あまね しん しょう ふか うたが のぞ っ  
遍からず、信を生ずること深からず、疑いを除くこと尽

くさざればなりいじようへ已上けた、化他いま えん。今の縁は自行じぎようの二智にちを稟うけ

て、仏の境界を極め、法界の信を起こし、円妙の道を増ま

し、根本の惑を断じ、変易の生を損ず。ただ生身しようじんおよび

生身得忍の兩種の菩薩のみ、ともに益やくするのみにあらず、

法身ほっしんと法身の後心ごしんとの兩種の菩薩もまたもつてともに益やく

す。化けの功くこうだい広大にして利潤弘深なるは、けだしこの經きようの

力用りきゆうなりへ已上いじよう、自行じぎよう。自行と化他との力用、勝劣分明りきゆう しょうれつぶんみやう

なること勿論なり。能もちろんく能よよくこれを見みよ。一代聖教いちだいしやうぎやうを鏡かがみ

に懸かけたる教相きやうそうなり。

ほとけ きょうがい きわ

じゅうによぜ ほうもん

じっかいたが

「仏の境界を極む」とは、十如是の法門なり。十界互

ぐそく

じっかい

じゅうによ

いんが

ごんじつ

にち

にきょう

わ

に具足して、十界・十如の因果、権実の二智・二境は我が

み なか あ

いちにん

も

つうだつ

げりよう

身の中に有って一人も漏るることなしと通達し解了し、

ぶつご さと きわ

ほうかい

しん

お

じっぼうかい

仏語を悟り極むるなり。「法界の信を起こす」とは、十法界

たい

じっぼうかい

こころ

じっぼうかい

ぎよう

を体となし、十法界を心となし、十法界を形となしたま

ほんがく

によらい

わ

み

なか

あ

しん

えんみよう

どう

える本覚の如来は我が身の中に有りと信ず。「円妙の道を

ま

じぎよう

けた

ふた

そうそくえんゆう

ほう

たま

増す」とは、自行と化他との二つは相即円融の法なれば、珠

ひかり

たから

さんとく

ひと

たま

とく

と光と宝との三徳はただ一つの珠の徳なるがごとく、

かたとき

あいはな

ぶつぼう

ふそくな

いっしよう

うち

ほとけ

な

片時も相離れず、仏法に不足無し、一生の中に仏に成る

べしと慶喜の念を増すなり。「根本の惑を断ず」とは、一念

むみよう ねむ さ ほんがく うつつ かえ しょうじ ねはん

無明の眠りを覚まして本覚の寤に還れば、生死も涅槃もと

きのう ゆめ あとかた な へんにやく しょう そん

もに昨日の夢のごとく跡形も無きなり。「変易の生を損ず」

どうごじ ごくらく ほうべんど ごくらく じつぼうぞ ごくらく

とは、同居士の極楽と方便士の極楽と実報士の極楽との

さんど おうじよう ひと か ど ぼさつ どう しゆぎよう ほとけ

三土に往生せる人、彼の土にて菩薩の道を修行して仏に

な ほつ いん うつ か かわ しだい すす

成らんと欲するのあいだ、因は移り果は易つて次第に進み

のぼ こっしゆ へ じようぶつ とお ま へんにやく しょうじ い

昇り、劫数を経て成仏の遠きを待つて変易の生死と云う

げい す し い じようい すす しょう い

なり。下位を捨つるをば死と云い、上位に進むをば生と云

へんにやく しょうじ じようど くのう

う。かくのごとき変易の生死は、浄土の苦惱にてあるなり。

ほんぷ われ

えど

ほっけ

しゅぎよう

ここに凡夫の我ら、この穢土において法華を修行すれば、

じっかいごぐ

ほうかいいちによ

じようど

ぼさつ

へんにやく

しよう

十界互具して法界一如なれば、浄土の菩薩の変易の生は

そん

ぶつどう

ぎよう

ま

へんにやく

しようじ

いつしよう

なか

つづ

損じ仏道の行は増して、変易の生死を一生の中に促めて

ぶつどう

じよう

ゆえ

しようじん

しようじんとくにん

りようしゅ

ぼさつ

仏道を成ず。故に、生身および生身得忍の両種の菩薩、

どう

ま

しよう

そん

ほっしん

ぼさつ

しようじん

す

道を増し生を損ずるなり。「法身の菩薩」とは生身を捨て

じっぼうど

こ

ごしん

ぼさつ

とうかく

ぼさつ

て実報土に居するなり。「後心の菩薩」とは等覚の菩薩なり。

しやくもん

しようじん

しようじんとくにん

ぼさつ

りやく

ただし、迹門には生身および生身得忍の菩薩を利益する

ほんもん

ほっしん

ごしん

ぼさつ

りやく

いま

なり。本門には法身と後身との菩薩を利益す。ただし、今は

しやくもん

かい

ほんもん

おさ

ひと

みようほう

な

ゆえ

ほんぷ

迹門を開し本門に摂めて一つの妙法と成す。故に、凡夫の

われ えど しゆぎよう ぎようりき じようど じゆうじ とうがく

我らの穢土の修行の行力をもつて浄土の十地・等覺の

ぼさつ りやく ぎよう ゆえ け くこうだい けた

菩薩を利益する行なるが故に、化の功広大なりへ化他の

とくよう りにんぐじん じぎよう とくよう えんどん ぎようじゃ じぎよう

徳用。 「利潤弘深」とはへ自行の徳用、円頓の行者は自行

けた いっぽう も いちねん ぐそく

と化他と一法をも漏らさず一念に具足して、横に十方法界

へん ゆえ ひろ たて さんぜ わた ほつしよう えんでい

に遍するが故に弘きなり、豎には三世に亘つて法性の淵底

きわ ゆえ ふか きよう じぎよう りきゆう

を極むるが故に深きなり。この経の自行の力用かくのごと

し。

けた しよぎよう じぎよう ぐ ちよう へんよく

化他の諸経は自行を具せざれば、鳥の片翼をもつては

そら と ゆえ じようぶつ ひと な いま ほけきよう

空を飛ばざるがごとし。故に、成仏の人も無し。今、法華経



は自行・化他の二行を開会して不足無きが故に、鳥の二つ  
の翼をもつて飛ぶに障り無きがごとく、成仏に滞り無  
し。

薬王品には十喩をもつて自行と化他との力用の勝劣を

判ぜり。第一の譬えに云わく「諸経は諸水のごとく、法華

は大海のごとし」云々〈取意〉。実に自行の法華経の大海に

は化他の諸経の衆水を入るること、昼夜に絶えず入ると

いえども増ぜず減ぜず、不可思議の徳用を顕す。諸経の衆

水は片時のほども法華経の大海を納るることなし。自行と

けた しょうれつ 化他との勝劣かくのごとし。一つをもつて諸 むろもろ を例 れい せよ。

じょうらい ひゆ 上来の譬喩は皆、仏の所説 しよせつ なり。人の語 ことば を入れず。こ

むね こころ の旨 いちだいしよぎようかがみ を意得れば、一代聖教鏡 か に懸 くも けて陰 な り無し。この

もんしゃく み 文 たれ 釈 ひと を見て誰 めいわく の人 さんぜ が迷惑 しよぶつ せんや。三世 さんぜ の諸 しよぶつ 仏 しよぶつ の総勘 しゆつせ 文 しよぶつ なり。

ひと えしゃく あえて人の会釈 ひ を引き入 い るべからず。三世 さんぜ の諸 しよぶつ 仏 しよぶつ の出世 しゆつせ の

ほんかい いっさいしゆじようじようぶつ 本懐 じきどつ なり。一切 じきどつ 衆生成 じきどつ 仏 じきどつ の直道 じきどつ なり。

しじゆうにねん けた 四十二年 きよう の化他 た の経 た をもつて立 た つるところ しゆうじゆう の宗 しゆうじゆう 々 しゆうじゆう は、

けごん しんごん 華嚴 だるま ・真言 じようど ・達磨 ほつそう ・浄土 さんろん ・法相 りつしゆう ・三論 くしゃ ・律宗 じようじつとう ・俱舍 くしゃ ・成実 じようじつとう 等

しよしゆう みな の諸宗 みな なり。これらは皆 みな ことごとく法華 ほっけ より已前 いぜん の八教 はつきよう

なか おし みな ほうべん けん たん たい たい ほうべん  
の中の教えなり。皆これ方便なり。兼・但・対・帯の方便の

ゆういん さんぜ しょぶつ せつきよう しだい しい  
誘引なり。三世の諸仏の説教の次第なり。この次第を糾し

ほうもん だん しだい たが ぶつぼう  
て法門を談ず。もし次第に違わば、仏法にあらざるなり。

いちだい きようしゆ しゃかによらい さんぜ しょぶつ せつきよう しだい ただ  
一代教主の釈迦如来も、三世の諸仏の説教の次第を糾し

いちじ たが われ きよう い  
て、一字も違わず我もまたかくのごととして、経に云わく

さんぜ しょぶつ せつぼう ぎしき われ いま  
「三世の諸仏の説法の儀式のごとく、我も今またかくのご

むふんべつ ほう と いじよう たが なが さんぜ  
とく無分別の法を説く」已上。もしこれに違わば、永く三世

しょぶつ ほんい そむ たしゆう そし おのおの わ しゆう た  
の諸仏の本意に背く。他宗の祖師、各我が宗を立てて

ほつけしゆう あらす ちやま なか ちやま まよ なか まよ  
法華宗と諍うこと、誤りの中の誤り、迷いの中の迷いな

り。

ちようたかく けつ さんのういん

徴他学の決（山王院）にこれを破して云わく「およそ

はちまんほうぞう ぎようそろう す

八万法蔵、その行相を統ぶるに、四教を出でず。頭辺に示

ぞう つう べつ えん すなわ しょうもん えんがく ぼさつ ぶつじよう

すがごとし。蔵・通・別・円は即ち声聞・縁覚・菩薩・仏乘

しんごん ぜんもん けごん さんろん ゆいしき りつごう じようぐ にりんとう

なり。真言・禅門・華嚴・三論・唯識・律業・成俱の二論等の

のうしよ きようり

能所の教理、いかでかこの四つに過ぎん。もし過ぐと言わ

げじや よつ す せい

ば、あに外邪にあらずや。もし出でずと言わば、便ち他の

しよご すなわ しじよう か もんとく のち こた

所期（即ち四乗の果なり）を問得せよ。しかして後に答え

したが ごくり たず せ わ しきよう ぎようそろう なら

に随つて極理を推ね徴めよ。我が四教の行相をもつて並

かんが かんが か しよご か けつじよう われ たが したが  
べ 検えて彼の所期の果を決定せよ。もし我と違わば、随

すなわ けごん ぎきよう  
つて即ちこれを詰めよ。しばらく華嚴の五教のごときは、

おのおの しゆいんこうかあ しよ ちゆう ご ぎよう いち いつきよう  
各々に修因向果有り。初・中・後の行、一ならず。一教

いっかまさ しよご ぞう つう べつ えん いん か  
一果合にこれ所期なるべし。もし蔵・通・別・円の因と果と

ぶつきよう さんしゆほうりん さんじきよう  
にあらずんば、これ仏教ならざるのみ。三種法輪、三時教

とう なか つ さだ なんじ なにもの しよご じよう  
等、中に就いて定むべし。汝、何者をもつてか所期の乗と

い ぶつじよう じようぶつ かんぎよう み  
なすや。もし仏乗なりと言わば、いまだ成仏の觀行を見

ほきつ そく り ちゆうどう い  
ず。もし菩薩なりと言わば、これまた即・離の中道の異あ

なんじ まさ と へん と  
るなり。汝、正しくいずれを取るや。もし離の辺を取らば、

果かとして成じようずべき無なし。もし即是そくぜを要ようとせば、仏ほとけに例れいし

てこれなんを難なんぜよ。謬あやまつて真言しんごんを誦じゆすとも三觀さんがん一心いつしんの妙趣みようしゆ

を会えせずんば、恐おそらくは別人べつじんに同じおなて妙理みようりを証しょうせじ。ゆえ

に、他たの所期しよごの極おもむきを逐おつて、理りへ我わが宗しゆうの理りなりじゆんに準じゆん

じて徴せむべし。因明いんみようの道理どうりは外道げどうと対たいす。多おほくは小乘しようじようお

よび別教べつきように在あり。もし法華ほつげ・華嚴けごん・涅槃ねはん等の經きように望のぞめば

接引しよういん門もんなり。権かりに機きに對たいして設もうけたり。終ついにはもつて引進いんしん

するなり。邪小じゃしようの徒やからをして会えして真理しんりに至いたらしむるなり。

ゆえに、論ろんずる時ときは、四依しえき擊目やくもくの志こころざしを存そんしてこれに

しゅうじやく

執著しゅうじやくすることなかれ。また、すべからく他の義ぎをもつて

じぎ たいけん したが ぜひ けつ しゅう うら

自義じぎに対検たいけんして、随したがつて是非ぜひを決けつすべし。執しゅうしてこれを怨うら

だいてい た おお さんぎよう あ えん しいた すく

むことなかれ。大底だいてい、他たは多く三教さんぎように在あり、円旨えんし至いたつて少すく

せんとくだいし しよはん しよしゅう しよりゅう

なきのみ。先徳大師せんとくだいしの所判しよはんかくのごとし。諸宗しよしゅうの所立しよりゅう、

かがみ か くも な まつだい がくしや なん み

鏡かがみに懸かけて陰くもり無なし。末代まつだいの学者がくしや、何なんぞ、これを見みずして、

きようもん はん

みだりに教門きようもんを判はんぜんや。

たいこう さんぎよう よ よ がく とん ぜん えん さんぎよう

大綱たいこうの三教さんぎようを能よく能よく学がくすべし。頓とんと漸ぜんと円えんとの三教さんぎよう

いちだいししうぎよう そう さんたい とん ぜん ふた

なり。これ一代聖教いちだいししうぎようの総そうの三諦さんたいなり。頓とんと漸ぜんとの二ふたつは

しじゅうにねん せつ えんぎよう ひと はちかねん せつ がっ

四十二年しじゅうにねんの説せつなり。円教えんぎようの一ひとつは八箇年はちかねんの説せつなり。合がっして

ごじゆうねん

ほか ほうな

なに よ

まよ

五十年なり。この外に法無し。何に由つてかこれに迷わん。

しゆじよう

あ とき

さんたい い

ぶつか じよう

とき

衆生に有る時にはこれを三諦と云い、仏果を成ずる時に

さんじん

い

いちぶつ

いみよう

と

あらわ

はこれを三身と云う。一物の異名なり。これを説き顕すを

いちだいししようぎよう

い

かいえ

ひと

そう

さんたい

一代聖教と云う。これを開会してただ一つの総の三諦と

じよう

とき

じようぶつ

かいえ

い

じぎよう

い

成す時に成仏す。これを開会と云い、これを自行と云う。

たしゆう

た

しゆうじゆう

そう

さんたい

ふんべつ

また他宗の立つるところの宗々は、この総の三諦を分別

やっ

おのおの

しゆう

た

えんまん

り

して八つとなす。各々に宗を立つるによつて、円満の理を

か

じようぶつ

りな

ゆえ

よしゆう

じつ

ほとけな

闕いて成仏の理無し。この故に余宗には実の仏無きなり。

ゆえ

きり

こころ

ふそく

きり

故に、これを嫌う意は、不足なりと嫌うなり。



えんぎよう と

かん

いつさいしよほう

えんゆうえんまん

じゆうごや

円教を取って観ずれば、一切諸法は円融円満して十五夜

つき ふそくな

まんぞく くきよう

ぜんあく

きら

の月に不足無きがごとく満足し究竟す。善悪をも嫌わず、

おりふし

えら

じようしよ

もと

じんぴん

えら

いつさい

折節をも撰ばず、静処をも求めず、人品をも扱ばず、「一切

しよほう

みな

ぶつぼう

し

しよほう

つうだつ

すなわ

諸法は皆これ仏法なり」と知りぬれば、諸法に通達す。即

ひどう

ぎよう

ぶつどう

じよう

ゆえ

てん

ち

すい

か

ち非道を行ずとも仏道を成ずるが故なり。天・地・水・火・

ふう

ごち

によらい

いつさいしゆじよう

しんしん

なか

じゆうざい

風はこれ五智の如来なり。一切衆生の身心の中に住在し

かたとき

はな

ゆえ

せけん

しゆつせ

わごう

て、片時も離るることなきが故に、世間と出世と和合して

しんちゆう

あ

こころ

ほか

まった

べつ

ほうな

ゆえ

心中に有って、心の外には全く別の法無きなり。故に、

き

とき

た

どころ

すみ

ぶっか

じよう

とどこお

これを聞く時、立ち所に速やかに仏果を成ずること滞

なし。道理至極なり。

総の三諦とは、譬えば珠と光と宝とのごとし。この三徳

有るによつて如意宝珠と云う。故に、総の三諦に譬う。も

しまた珠の三徳を別々に取り放さば、何の用にも叶うべか

らず。隔別の方便教の宗々もまたかくのごとし。珠を

ば法身に譬え、光をば報身に譬え、宝をば応身に譬う。

この総の三徳を分別して宗を立つるを不足と嫌うなり。こ

れを丸じて一つとなすを総の三諦と云う。この総の三諦は

三身即一の本覚の如来なり。

じやつこう

かがみ

たと

どうこ

ほうべん

じつぼう

さんど

また寂光をば鏡に譬え、同居と方便と実報との三土を

かがみ

うつ

ぞう

たと

しど

いちど

さんじん

いちぶつ

ば鏡に遷る像に譬う。四土も一土なり。三身も一仏なり。

いま

さんじん

しど

わごう

ほとけ

いったい

とく

今はこの三身と四土と和合して仏の一体の徳なるを、

じやつこう

ほとけ

い

じやつこう

ほとけ

えんぎよう

ほとけ

寂光の仏と云う。寂光の仏をもつて円教の仏となし、

えんぎよう

ほとけ

うつつ

じつぶつ

よ

さんど

ほとけ

ゆめ

円教の仏をもつて寤の実仏となす。余の三土の仏は夢

なか

ごんぶつ

さんぜ

しよぶつ

おな

ことば

かんもん

の中の権仏なり。これは三世の諸仏のただ同じ語に勘文し

たま

そう

きようそう

ひと

ことば

い

えしやく

あ

給える総の教相なれば、人の語も入らず、会釈も有らず。

たが

さんぜ

しよぶつ

そむ

たてまつ

だいざいにん

もしこれに違わば、三世の諸仏に背き奉る大罪人なり。

てんま

げどう

なが

ぶつぼう

そむ

ゆえ

天魔・外道なり。永く仏法に背くが故に。

これを秘蔵して他人には見せざれ。もし秘蔵せずしてみ

ひろう

ぶつぼう

しょうりな

にせ

みようがな

だりにこれを披露せば、仏法に証理無く、二世に冥加無か

ぼう

ひとしゆつたい

さんぜ

しよぶつ

そむ

ゆえ

ふたり

らん。謗ずる人出来せば、三世の諸仏に背くが故に、二人

あくどう

お

し

ゆえ

いまし

ながらともに悪道に堕ちんと識るが故に、これを誠むるな

よ

よ

ひぞう

ふか

り

しょう

さんぜ

しよぶつ

り。能く能く秘蔵して深くこの理を証し、三世の諸仏の

ごほんい

あいかな

にしよう

にてん

じゅうらせつ

おうご

こうむ

とどこお

御本意に相叶い、二聖・二天・十羅刹の擁護を蒙り、滞

な

じようじようぼん

じゃっこう

おうじよう

と

しゆゆ

あいだ

くかい

り無く上品の寂光の往生を遂げ、須臾の間に九界

しょうじ

ゆめ

なか

かえ

きた

み

じつぼうほうかい

こくど

へん

生死の夢の中に還り来って、身を十方法界の国土に遍し、

こころ

いっさいうじよう

しんちゆう

い

うち

かんぼつ

そと

心を一切有情の身中に入れて、内よりは勧発し外よりは

いんどう

ないげそうおう

いんねんわごう

じざいじんずう

じひ

ちから

引導し、内外相応し、因縁和合して、自在神通の慈悲の力

ほごい

ひろ

しゅじよう

りやく

とごこお

あ

を施し、広く衆生を利益すること滞り有るべからず。

さんぜ

しよぶつ

いちだいいじんねん

おほ

せけん

三世の諸仏は、これを「一大事因縁」と思しめして、世間

しゅつげん

たま

いち

ちゆうどう

ほつけ

だい

に出現し給えり。「一」とは、中道なり、法華なり。「大」

くうたい

けごん

じ

けたい

あごん

とは、空諦なり、華嚴なり。「事」とは、仮諦なり、阿含・

ほうどう

はんにか

いじよう

いちだい

そう

さんたい

さと し

方等・般若なり。已上、一代の総の三諦なり。これを悟り知

ときぶつか

じよう

ゆえ

しゅつせ

ほんかい

じようぶつ

じきどう

る時仏果を成ずるが故に、出世の本懐、成仏の直道なり。

いん

いつさいしゅじよう

しんちゆう

そう

さんたいあ

じようじゆうふへん

「因」とは、一切衆生の身中に総の三諦有つて常住不変

そう

いん

い

えん

さんいんぶつしじよう

なり。これを総じて因と云うなり。「縁」とは、三因仏性は

有りといえども、善知識の縁に値わざれば、悟らず知らず  
有らわ ぜんちしき えん あ さと し  
顕れず、善知識の縁に値えば、必ず顕るるが故に、縁と  
い ぜんちしき えん あ かなら あらわ ゆえ えん  
云うなり。

しかるに、今、この一と大と事と因と縁との五事和合し  
いま いち だい じ いん えん ごじわごう

て、値い難き善知識の縁に値つて五仏性を顕さんこと、何  
あ がた ぜんちしき えん あ ごぶつしよう あらわ なん

の滞りか有らんや。春の時来つて風雨の縁に値いぬれば、  
とどまお あ はる とききた ふうう えん あ

無心の草木も皆ことごとく萌え出でて花を生じ、敷き栄え  
むしん そうもく みな も い はな しょう さ さか

て世に値う気色なり。秋の時に至つて月光の縁に値いぬれ  
よ あ けしき あき とき いた げっこう えん あ

ば、草木皆ことごとく実成り熟して、一切の有情を養育し  
そうもくみな みな じゆく いっさい うじよう よういく

じゆみよう

つ

じようよう

ついで

じようぶつ

とくゆう

あらわ

うたが

寿命を続ぎ長養し、終に成仏の徳用を顕す。これを疑

しん

ひとあ

むしん

そうもく

い、これを信ぜざるの人有るべしや。無心の草木すら、な

じんりん

おもつてかくのごとし。いかにいわんや人倫においてをや。

われ

まよ

ぼんぷ

いちぶん

こころ

あ

げ

我らは迷いの凡夫なりといえども、一分の心も有り解も

あ

ぜんあく

ふんべつ

おりふし

おも

し

いちぶん

こころ

あ

げ

有り、善悪を分別し、折節を思い知る。しかるに、宿縁に

もよお

しょう

ぶつぼうるふ

こくど

う

ぜんちしき

えん

催されて、生を仏法流布の国土に受けたり。善知識の縁に

あ

いんが

ふんべつ

じようぶつ

み

ぜんちしき

値いなば因果を分別して成仏すべき身をもつて、善知識に

あ

そうもく

おと

しんちゆう

さんいんぶつしょう

値うといえども、なお草木にも劣つて、身中の三因仏性を

あらわ

もくし

いわ

たびかなら

かなら

顕さずして黙止せる謂れあるべきや。この度必ず必ず

しょうじ ゆめ さ ほんがく うつつ かえ しょうじ きずな き  
生死の夢を覚まし、本覚の寤に還つて生死の継を切るべし。

いま いご ゆめ なか ほうもん こころ か  
今より已後は、夢の中の法門を心に懸くべからざるなり。  
さんぜ しょぶつ いっしん わごう みようほうれんげきよう しゆぎよう さわ  
三世の諸仏と一心と和合して妙法蓮華経を修行し、障り  
な かいご じぎよう けた にきよう さべつ かがみ か  
無く開悟すべし。自行と化他との二教の差別は鏡に懸け  
くも な さんぜ しょぶつ かんもん ひ  
て陰り無し。三世の諸仏の勘文かくのごとし。秘すべし、秘  
すべし。

こうあんになんつちのとうじゆうがつ にち  
弘安二年己卯十月 日

にちれん かおう  
日蓮 花押